

産学連携で挑戦する

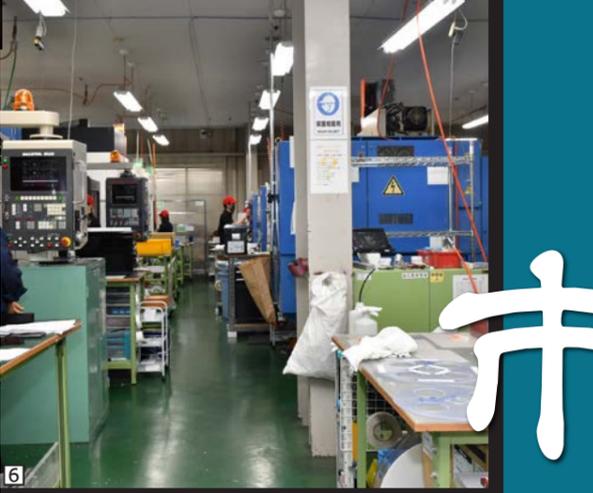
市内製造業



1



3



6



4



5



7



8



9



5

民間企業やNPOなどの「産」と、大学、研究機関などの「学」が連携し、企業の新たな商品開発や地域課題の解決を目指す産学連携。市内には産学連携で挑戦を続けている企業が数多くあります。その事例と、産学連携によって市内製造業が発展するよう平成31年度に設置した企業支援室を紹介します。

■問い合わせ先 本庁企業振興課企業支援室（☎34-2332）

産学連携 新商品開発 製造業の発展へ向けて マグネットチャック開発

江刺ふるさと市場の南側に本社工場を構える株式会社サンアイ精機。会社設立からしばらくは、下請け加工が中心でした。現在は、自社製品の製造販売を主力にしています。

「産学連携とは、役割分担」と話すのは、同社の菊地晋也代表取締役。「自分たちがやってきたことを、大学では理論的に証明してくれる。数式で表してくれる。まずは、産学連携をやってみてほしい」と語り、「いろいろな手段のうちの一つにすぎないかもしれ

ないが、やってみて分かることがある。大学の先生に直接相談するのは勇気がいるが、市の企業支援室に相談してみるといい」と産学連携を勧めています。

昨年、同社と岩手大学が産学連携により共同研究した、切削用永久磁石式マグネットチャックが特許を取得しました。

岩手大学との共同研究が始まったのは平成27年のこと。マグネットチャックとは、切削加工機械に磁力で金属を固定するための装置で、以前から同社で製造していました。それまでよりもさらに強力に固定でき、なおかつ、簡単に取り外しができるマグネット

チャックの開発をすべく、大学の門を叩きました。

共同研究をしたのは、吉野泰弘准教授（理工学部システム創成工学科機械科学コース）。研究期間は、追加実験なども含めると4年ほどで製品化に近づきました。菊地社長は「これを使えば、男性でも女性でも、誰でも簡単に作業ができる。将来、ロボット

による自動化が進んだ際にも対応できるものになった」と胸を張ります。

「吉野先生との研究は、まだ折り返し地点。現状に満足せず、これからも改良を続けていくそうです。

市内製造業全体が盛り上がることを望む菊地社長。自社の産学連携による技術向上が盛り上がりにつながることを信じて、いろいろなことにチャレンジしながら、力強く歩みを進めています。

株式会社サンアイ精機



1 代表取締役の菊地晋也さん。チャレンジを続けるパワフルな2代目社長
2 同社の主力商品であるマグネットチャック。国内では2番目のシェアを誇る。レバーを操作することで、簡単に脱着できる

産学連携 ビジネスマッチング 大学を介して 新たなビジネスが成立

他企業と共同研究をしている大学の准教授を介して、新

株式会社ヤマデン



1



2 久慈琥珀の依頼で加工した樹脂のリング（写真下）。香入れ（写真上）に取り付けられる
3 岩手営業所所長の及川淳さん。朗らかな笑顔で、自慢の自社商品を勧める営業マンでもある

たな取引を開始することになったケースもあります。

江刺中核工業団地に工場を構える株式会社ヤマデン（本社：東京都八王子市）。プラスチック精密加工や部品組み立てを主にを行っています。

4月、久慈琥珀株式会社（久慈市）と新たな取引が成立しました。きっかけとなったのは、1月に岩手大学の清水友治准教授（理工学部システム創成工学科機械科学コース）が企業訪問した際、同社の技術を高く評価したこと。清水准教授が、共同研究を始めた久慈琥珀からプラスチック加工の委託先を探していると

引が始まりました。

設計図が無く現物を見ながらの精密な加工でしたが、ヤマデンの及川淳岩手営業所所長は「出来ると思った」と即決したそうです。最初に打診があつてから約1カ月後には納品という早さでした。

この取引をきっかけに、ヤマデンでは久慈琥珀の商品の代理店を始めました。今では全国にあるヤマデンの営業所で久慈琥珀の製品を購入することができず。自社だけでなく取引先も発展することを望む社風が、新しい仕事へとつながっていきました。

の相談を受け、同社にヤマデンを紹介したことにより、取